

upL^AT_EX 2_ε について

中野 賢 & 日本語 T_EX 開発コミュニティ & TTK

作成日：2017/12/02

注意：

この文書は、「コミュニティ版 pL^AT_EX 2_ε」をベースに upT_EX 向けの調整を加えた、「コミュニティ版 upL^AT_EX 2_ε」の付属文書です。

アスキー pT_EX は、高品質の日本語組版ソフトウェアとしてデファクトスタンダードの地位にあるといえます。しかし、pT_EX には

- 直接使える文字集合が原則的に JIS X 0208（JIS 第 1,2 水準）の範囲に限定されていること、
- 8bit の非英語欧文との親和性が高いとは言えないこと、
- pT_EX の利用が日本語に限られ、中国語・韓国語との混植への利用が進んでいないこと

といった弱点がありました。

これらの弱点を克服するため、pT_EX の内部コードを Unicode 化した拡張版が upT_EX です。また、upT_EX 上で用いる Unicode 版 pL^AT_EX が upL^AT_EX です¹。現在の upL^AT_EX は、日本語 T_EX 開発コミュニティが配布しているコミュニティ版 pL^AT_EX² をベースにしています。開発中の版は pL^AT_EX と同様に、GitHub のリポジトリ³で管理しています。upL^AT_EX はアスキーとは無関係ですので、バグレポートはアスキー宛てではなく、日本語 T_EX 開発コミュニティに報告してください。T_EX Forum や GitHub の Issue システムが利用できます。

¹<http://www.t-lab.opal.ne.jp/tex/uptex.html>

²<https://github.com/texjporg/platex>

³<https://github.com/texjporg/uplatex>

1 この文書について

この文書は $\text{up}\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X } 2_{\epsilon}$ の概要を示していますが、使い方のガイドではありません。ほとんどの機能は元となっている $\text{p}\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X } 2_{\epsilon}$ や $\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X } 2_{\epsilon}$ と同等ですので、それぞれの付属文書などを参照してください。

$\text{up}\text{T}\text{E}\text{X}$ については公式ウェブサイトあるいは [1] (英語) を参照してください。この文書の構成は次のようになっています。

第 1 節 この節です。この文書についての概要を述べています。

第 2 節 $\text{up}\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X } 2_{\epsilon}$ で拡張した機能についての概要です。付属のクラスファイルやパッケージファイルについても簡単に説明しています。

第 3 節 現在のバージョンの $\text{up}\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X}$ と旧バージョン、あるいは元となっている $\text{p}\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X}$ / $\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X}$ との互換性について述べています。

付録 A この文書ソース (`uplatex.dtx`) の `DOCSTRIP` のためのオプションについて述べています。

付録 B $\text{up}\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X } 2_{\epsilon}$ の `dtx` ファイルをまとめて、一つのソースコード説明書にするための文書ファイルの説明をしています。

付録 C 付録 B で説明した文書ファイルを処理する `sh` スクリプト (手順) などについて説明しています。

2 $\text{up}\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X } 2_{\epsilon}$ の機能について

$\text{up}\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X } 2_{\epsilon}$ が提供するファイルは、次の 3 種類に分類することができます。この構成は $\text{p}\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X } 2_{\epsilon}$ と同様です。

- フォーマットファイル
- クラスファイル
- パッケージファイル

2.1 フォーマットファイル

$\text{up}\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X}$ のフォーマットファイルを作成するには、ソースファイル “`uplatex.ltx`” を $\epsilon\text{-up}\text{T}\text{E}\text{X}$ の `INI` モードで処理します⁴。ただし、 $\text{T}\text{E}\text{X Live}$ や $\text{W32}\text{T}\text{E}\text{X}$ ではこの処

⁴2016 年以前は $\text{up}\text{T}\text{E}\text{X}$ と $\epsilon\text{-up}\text{T}\text{E}\text{X}$ のどちらでもフォーマットを作成することができましたが、2017 年に $\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X}$ が $\epsilon\text{-p}\text{T}\text{E}\text{X}$ 必須となったことに伴い、 $\text{up}\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X}$ も $\epsilon\text{-up}\text{T}\text{E}\text{X}$ が必須となりました。

理を簡単にする `fmtutil-sys` あるいは `fmtutil` というプログラムが用意されています。以下を実行すれば、フォーマットファイル `uplatex.fmt` が作成されます。

```
fmtutil-sys --byfmt uplatex
```

次のリストが、`uplatex.ltx` の内容です。ただし、このバージョンでは、 \LaTeX から up\LaTeX への拡張を `uplcore.ltx` をロードすることで行ない、`latex.ltx` には直接、手を加えないようにしています。したがって `uplatex.ltx` はとても短いものとなっています。`latex.ltx` には \LaTeX のコマンドが、`uplcore.ltx` には up\LaTeX で拡張したコマンドが定義されています。

```
1 \*plcore\
```

`latex.ltx` の末尾で使われている `\dump` をいったん無効化します。

```
2 \let\orgdump\dump
```

```
3 \let\dump\relax
```

`latex.ltx` を読み込みます。 \TeX Live の標準的インストールでは、この中で Babel 由来のハイフネーション・パターン `hyphen.cfg` が読み込まれるはずですが、

```
4 \input latex.ltx
```

`uplcore.ltx` を読み込みます。

```
5 \typeout{*****^J%
```

```
6      *^J%
```

```
7      * making upLaTeX format^J%
```

```
8      *^J%
```

```
9      *****}
```

```
10 \makeatletter
```

```
11 \input uplcore.ltx
```

フォーマット作成時に up\LaTeX のバージョンがわかるように、端末に表示します。

```
12 \the\everyjob
```

$\text{up\LaTeX 2}_{\epsilon}$ の起動時に `uplatex.cfg` がある場合、それを読み込むようにします ($\text{p\LaTeX 2}_{\epsilon}$ が `platex.cfg` を読み込むのと同様)。バージョン 2016/07/01 ではコードを `uplcore.ltx` に入れていましたが、`uplatex.ltx` へ移動しました。

```
13 \everyjob\expandafter{%
```

```
14   \the\everyjob
```

```
15   \IfFileExists{uplatex.cfg}{%
```

```
16     \typeout{*****^J%
```

```
17         * Loading uplatex.cfg.^J%
```

```
18         *****}%
```

```
19     \input{uplatex.cfg}}{%
```

```
20 }
```

フォーマットファイルにダンプします。

```
21 \let\dump\orgdump
```

```
22 \let\orgdump\@undefined
```

```
23 \makeatother
```

```

24 \dump
25 %\endinput
26 </plcore>

```

実際に $\text{upL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X} 2_{\epsilon}$ への拡張を行なっている `uplcore.ltx` は、DOCSTRIP プログラムによって、次のファイルの断片が連結されたものです。

- `uplvers.dtx` は、 $\text{upL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X} 2_{\epsilon}$ のフォーマットバージョンを定義しています。
- `uplfonts.dtx` は、NFSS2 を拡張しています。
- このほか、 $\text{pL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X} 2_{\epsilon}$ に含まれる `plcore.dtx` をそのまま利用しています。これは、上記以外のコマンドでフォーマットファイルに格納されるコマンドを定義しています。

また、プリロードフォントや組版パラメータなどのデフォルト設定は、`uplcore.ltx` の中で `upldefs.ltx` をロードすることにより行います。このファイル `upldefs.ltx` も `uplfonts.dtx` から生成されます。

注意：

このファイルに記述されている設定を変更すれば $\text{upL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X} 2_{\epsilon}$ をカスタマイズすることができますが、その場合は `upldefs.ltx` を直接修正するのではなく、いったん `upldefs.cfg` という名前でコピーして、そのファイルを編集してください。フォーマット作成時に `upldefs.cfg` が存在した場合は、そちらが `upldefs.ltx` の代わりに読み込まれます。

ここまで見てきたように、 $\text{upL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ の各ファイルはそれぞれ $\text{pL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ での対応するファイル名の頭に “u” を付けた名前になっています。

2.1.1 バージョン

$\text{upL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X} 2_{\epsilon}$ のバージョンやフォーマットファイル名は、`uplvers.dtx` で定義しています。これは、 $\text{pL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X} 2_{\epsilon}$ のバージョンやフォーマットファイル名が `plvers.dtx` で定義されているのと同じです。

2.1.2 NFSS2 コマンド

$\text{upL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X} 2_{\epsilon}$ は、 $\text{pL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X} 2_{\epsilon}$ と同じ方式で NFSS2 を拡張し、和文フォントを選択できるようにしています。

2.1.3 出力ルーチンとフロート

upL^AT_EX 2_ε は pL^AT_EX 2_ε と共通の `plcore.dtx` を使用していますので、出力ルーチンや脚注マクロなどは pL^AT_EX 2_ε と同じように動作します。

2.2 クラスファイルとパッケージファイル

upL^AT_EX 2_ε が提供をするクラスファイルやパッケージファイルは、pL^AT_EX 2_ε に含まれるファイルを基にしています。

upL^AT_EX 2_ε に付属のクラスファイルは、次のとおりです。

- `ujarticle.cls`, `ujbook.cls`, `ujreport.cls`

横組用の標準クラスファイル。`ujclasses.dtx` から作成される。それぞれ `jarticle.cls`, `jbook.cls`, `jreport.cls` の upL^AT_EX 版。

- `utarticle.cls`, `utbook.cls`, `utreport.cls`

縦組用の標準クラスファイル。`ujclasses.dtx` から作成される。それぞれ `tarticle.cls`, `tbook.cls`, `treport.cls` の upL^AT_EX 版。

なお `jltxdoc.cls` の upL^AT_EX 版はありませんが、これは pL^AT_EX のものが upL^AT_EX でもそのまま使えます。

また、upL^AT_EX 2_ε に付属のパッケージファイルは、次のとおりです。

- `uptrace.sty`

`ptrace.sty` の upL^AT_EX 版。L^AT_EX でフォント選択コマンドのトレースに使う `tracefnt.sty` が再定義してしまう NFSS2 コマンドを、upL^AT_EX 2_ε 用に再々定義するためのパッケージ。`uplfonts.dtx` から作成される。

他の pL^AT_EX のパッケージは、upL^AT_EX でもそのまま動作します。

3 他のフォーマット・旧バージョンとの互換性

ここでは、この upL^AT_EX 2_ε のバージョンと以前のバージョン、あるいは pL^AT_EX 2_ε/L^AT_EX 2_ε との互換性について説明をしています。

3.1 pL^AT_EX 2_ε および L^AT_EX 2_ε との互換性

upL^AT_EX 2_ε は、pL^AT_EX 2_ε の上位互換という形を取っていますので、クラスファイルやいくつかのコマンドを置き換えるだけで、たいていの pL^AT_EX 2_ε 文書を簡単に upL^AT_EX 2_ε 文書に変更することができます。ただし、upL^AT_EX 2_ε のデフォルトの日

本語フォントメトリックは p \LaTeX 2 ϵ のそれと異なりますので、レイアウトが変化することがあります。また、 \LaTeX 2 ϵ のいくつかの命令の定義も変更していますので、 \LaTeX 2 ϵ で処理できるファイルを up \LaTeX 2 ϵ で処理した場合に完全に同じ結果になるとは限りません。

また、up \LaTeX 2 ϵ は新しいマクロパッケージですので、2.09 互換モードをサポートしていません。 \LaTeX 2 ϵ の仕様に従ってドキュメントを作成してください。

p \LaTeX 2 ϵ 向けあるいは \LaTeX 2 ϵ 向けに作られた多くのクラスファイルやパッケージファイルはそのまま使えると思います。ただし、例えばクラスファイルが p \LaTeX 標準の漢字エンコーディング (JY1, JT1) を前提としている場合は、up \LaTeX で採用した漢字エンコーディング (JY2, JT2) と合致せずにエラーが発生してしまいます。この場合は、そのクラスファイルが up \LaTeX に対応していないことになります。このような場合は、p \LaTeX を使い続けるか、その作者に連絡して up \LaTeX に対応してもらうなどの対応をとってください。

3.2 latexrelease パッケージへの対応

\LaTeX <2015/01/01>で導入された latexrelease パッケージをもとに、新しい p \LaTeX では platexrelease パッケージが用意されました。本来は up \LaTeX でも同様のパッケージを用意するのがよいのですが、現在は p \LaTeX から up \LaTeX への変更点が含まれていませんので、幸い platexrelease パッケージをそのまま用いることができます。このため、up \LaTeX で独自のパッケージを用意することはしていません。platexrelease パッケージを用いると、過去の up \LaTeX をエミュレートしたり、フォーマットを作り直すことなく新しい up \LaTeX を試したりすることができます。詳細は platexrelease のドキュメントを参照してください。

A DOCSTRIP プログラムのためのオプション

この文書のソース (uplatex.dtx) を DOCSTRIP プログラムで処理することによって、いくつかの異なるファイルを生成することができます。DOCSTRIP プログラムの詳細は、docstrip.dtx を参照してください。

この文書の DOCSTRIP プログラムのためのオプションは、次のとおりです。

オプション	意味
plcore	フォーマットファイルを作るためのファイルを生成
pldoc	upL ^A T _ε X のソースファイルをまとめて組版するための文書ファイル (upldoc.tex) を生成
shprog	上記のファイルを作成するための sh スクリプトを生成
Xins	上記の sh スクリプトや perl スクリプトを取り出すための DOCSTRIP バッチファイル (Xins.ins) を生成

B 文書ファイル

ここでは、このパッケージに含まれている dtx ファイルをまとめて組版し、ソースコード説明書を得るための文書ファイル `upldoc.tex` について説明をしています。個別に処理した場合と異なり、変更履歴や索引も付きます。

デフォルトではソースコードの説明が日本語で書かれます。もし英語の説明書を読みたい場合は、

```
\newif\ifJAPANESE
```

という内容の `uplatex.cfg` を予め用意してから `upldoc.tex` を処理してください (2016 年 7 月 1 日以降の upL^AT_εX が必要)。

コードは pL^AT_εX のものと (ファイル名を除き) ほぼ同一なので、ここでは違っている部分だけ説明します。

```
27 < *pldoc>
28 \begin{filecontents}{upldoc.dic}
29 西暦      せいれき
30 和暦      われき
31 \end{filecontents}
```

pL^AT_εX のドキュメントでは、`plext.dtx` の中で組み立てるサンプルのために `plext` パッケージが必要ですが、upL^AT_εX のファイルにはそのようなサンプルが含まれないので除外しています。

```
32 \documentclass{jltxdoc}
33 %\usepackage{plext} %% comment out for upLaTeX
34 \listfiles
35
36 \DoNotIndex{\def,\long,\edef,\xdef,\gdef,\let,\global}
37 \DoNotIndex{\if,\ifnum,\ifdim,\ifcat,\ifmmode,\ifvmode,\ifhmode,%
38             \iftrue,\iffalse,\ifvoid,\ifx,\ifeof,\ifcase,\else,\fi}
39 \DoNotIndex{\box,\copy,\setbox,\unvbox,\unhbox,\hbox,%
40             \vbox,\vtop,\vcenter}
41 \DoNotIndex{@empty,\immediate,\write}
42 \DoNotIndex{\egroup,\bgroup,\expandafter,\begingroup,\endgroup}
```

```

43 \DoNotIndex{\divide,\advance,\multiply,\count,\dimen}
44 \DoNotIndex{\relax,\space,\string}
45 \DoNotIndex{\csname,\endcsname,\@spaces,\openin,\openout,%,
46         \closein,\closeout}
47 \DoNotIndex{\catcode,\endinput}
48 \DoNotIndex{\jobname,\message,\read,\the,\m@ne,\noexpand}
49 \DoNotIndex{\hsize,\vsize,\hskip,\vskip,\kern,\hfil,\hfill,\hss,\vss,\unskip}
50 \DoNotIndex{\m@ne,\z@,\z@skip,\@ne,\tw@,\p@,\@minus,\@plus}
51 \DoNotIndex{\dp,\wd,\ht,\setlength,\addtolength}
52 \DoNotIndex{\newcommand,\renewcommand}
53
54 \ifJAPANESE
55 \IndexPrologue{\part*{索引}}%
56         \markboth{索引}{索引}%
57         \addcontentsline{toc}{part}{索引}%
58 イタリアック体の数字は、その項目が説明されているページを示しています。
59 下線の引かれた数字は、定義されているページを示しています。
60 その他の数字は、その項目が使われているページを示しています。}
61 \else
62 \IndexPrologue{\part*{Index}}%
63         \markboth{Index}{Index}%
64         \addcontentsline{toc}{part}{Index}%
65 The italic numbers denote the pages where the corresponding entry
66 is described, numbers underlined point to the definition,
67 all others indicate the places where it is used.}
68 \fi
69 %
70 \ifJAPANESE
71 \GlossaryPrologue{\part*{変更履歴}}%
72         \markboth{変更履歴}{変更履歴}%
73         \addcontentsline{toc}{part}{変更履歴}}
74 \else
75 \GlossaryPrologue{\part*{Change History}}%
76         \markboth{Change History}{Change History}%
77         \addcontentsline{toc}{part}{Change History}}
78 \fi
79
80 \makeatletter
81 \def\changes@#1#2#3{%
82   \let\protect\@unexpandable@protect
83   \edef\@tempa{\noexpand\glossary{#2\space\currentfile\space#1\levelchar
84         \ifx\saved@macroname\@empty
85           \space\actualchar\generalname
86         \else
87           \expandafter\@gobble
88           \saved@macroname\actualchar
89           \string\verb\quotechar*%
90           \verbatimchar\saved@macroname
91           \verbatimchar
92         \fi

```



```

93             :\levelchar #3}}%
94 \@tempa\endgroup\@esphack}
95 \makeatother
96 \RecordChanges
97 \CodelineIndex
98 \EnableCrossrefs
99 \setcounter{IndexColumns}{2}
100 \settowidth\MacroIndent{\ttfamily\scriptsize 000\ }

    ここからが本文ページとなります。

101 \begin{document}
102 \title{The \upLaTeXe\ Sources}
103 \author{Ken Nakano \& Japanese \TeX\ Development Community \& TTK}
104
105 % This command will be used to input the patch file
106 % if that file exists.
107 \newcommand{\includelpatch}{%
108 \def\currentfile{uplpatch.ltx}
109 \part{uplpatch}
110 {\let\ttfamily\relax
111 \xdef\filekey{\filekey, \thepart={\ttfamily\currentfile}}}%
112 Things we did wrong\ldots
113 \IndexInput{uplpatch.ltx}}
114
115 % Get the date and patch level from uplvers.dtx
116 \makeatletter
117 \let\patchdate=\@empty
118 \begingroup
119 \def\ProvidesFile#1\pfmtversion#2#3\ppatch@level#4{%
120 \date{#2}\xdef\patchdate{#4}\endinput}
121 \input{uplvers.dtx}
122 \global\let\X@date=\@date
123
124 % Add the patch version if available.
125 \long\def\Xdef#1#2#3\def#4#5{%
126 \xdef\X@date{#2}%
127 \xdef\patchdate{#5}%
128 \endinput}%
129 \InputIfFileExists{uplpatch.ltx}
130 {\let\def\Xdef}{\global\let\includelpatch\relax}
131 \endgroup
132
133 \ifx\@date\X@date
134 \def\Xpatch{0}
135 \ifx\patchdate\Xpatch\else
136 % number is assumed
137 \ifnum\patchdate>0
138 \edef\@date{\@date\space Patch level\space\patchdate}
139 \else
140 \edef\@date{\@date\space Pre-Release\space\patchdate}

```

```

141 \fi\fi
142 \else
143 \warning{uplpatch.ltx does not match uplvers.dtx!}
144 \let\includeltpatch\relax
145 \fi
146 \makeatother
147
148 \pagenumbering{roman}
149 \maketitle
150 \renewcommand\maketitle{}
151 \tableofcontents
152 \clearpage
153 \pagenumbering{arabic}
154
155 \DocInclude{uplvers} % upLaTeX version
156
157 \DocInclude{uplfonts} % NFSS2 commands
158
159 %\DocInclude{plcore} % kernel commands (comment out for upLaTeX)
160
161 \DocInclude{ukinsoku} % kinsoku parameter
162
163 \DocInclude{ujclasses} % Standard class
164
165 %\includeltpatch % patch file (comment out May 8, 2016)
166
167 \StopEventually{\end{document}}
168
169 \clearpage
170 \pagestyle{headings}
171 % Make TeX shut up.
172 \hbadness=10000
173 \newcount\hbadness
174 \hfuzz=\maxdimen
175 %
176 \PrintChanges
177 \clearpage
178 %
179 \begingroup
180 \def\endash{--}
181 \catcode'\-\active
182 \def-\{\futurelet\temp\indexdash}
183 \def\indexdash{\ifx\temp-\endash\fi}
184
185 \PrintIndex
186 \endgroup
187 \let\PrintChanges\relax
188 \let\PrintIndex\relax
189 \end{document}
190 </pldoc>

```

C おまけプログラム

C.1 シェルスクリプト mkpldoc.sh

upL^AT_EX 2_ε のマクロ定義ファイルをまとめて組版し、変更履歴と索引も付けるときに便利なシェルスクリプトです。このシェルスクリプトの使用方法是次のとおりです。

```
sh mkpldoc.sh
```

コードは pL^AT_EX 2_ε のものと（ファイル名を除き）ほぼ同一なので、ここでは違う部分だけ説明します。

```
191 <shprog>
192 for f in upldoc.toc upldoc.idx upldoc.glo ; do
193 if [ -e $f ]; then rm $f; fi
194 done
195 echo "" > ltxdoc.cfg
196 uplatex upldoc.tex
```

変更履歴や索引の生成には mendex を用いますが、upL^AT_EX の場合は UTF-8 モードで実行する必要がありますので、-U というオプションを付けます⁵。makeindex コマンドには、このオプションがありません。

```
197 mendex -U -s gind.ist -d upldoc.dic -o upldoc.ind upldoc.idx
198 mendex -U -f -s gglo.ist -o upldoc.gls upldoc.glo
199 echo "\includeonly{" > ltxdoc.cfg
200 uplatex upldoc.tex
201 echo "" > ltxdoc.cfg
202 uplatex upldoc.tex
203 # EOT
204 </shprog>
```

C.2 perl スクリプト dstcheck.pl

pL^AT_EX 2_ε のものがそのまま使えるので、upL^AT_EX 2_ε では省略します。

C.3 DOCSTRIP バッチファイル

付録 C.1 で説明をしたスクリプトを、このファイルから取り出すための DOCSTRIP バッチファイルです。コードは pL^AT_EX 2_ε のものと（ファイル名を除き）ほぼ同一なので、説明は割愛します。

```
205 <*Xins>
206 \input docstrip
207 \keepsilent
```

⁵uplatex コマンドも実際には UTF-8 モードで実行する必要がありますが、デフォルトの内部漢字コードが UTF-8 に設定されているはずですので、-kanji=utf8 を付けなくても処理できると思います。

```

208 {\catcode'#=12 \gdef\MetaPrefix{## }}
209 \declarepreamble\thispre
210 \endpreamble
211 \usepreamble\thispre
212 \declarepostamble\thispost
213 \endpostamble
214 \usepostamble\thispost
215 \generate{
216   \file{mkpldoc.sh}{\from{uplatex.dtx}{shprog}}
217 }
218 \endbatchfile
219 </Xins>

```

参考文献

- [1] Takuji Tanaka, Up \TeX — Unicode version of p \TeX with CJK extensions
TUGboat issue 34:3, 2013].
(<http://tug.org/TUGboat/tb34-3/tb108tanaka.pdf>)

変更履歴

2011/05/07 v1.0c-u00	取得 (based on platex.dtx
・ p \LaTeX 用から up \LaTeX 用に修正。	2016/06/19 v1.0l) 9
(based on platex.dtx	
1997/01/29 v1.0c) 1	2016/08/26 v1.0m-u01
2016/05/08 v1.0h-u00	・ uplatex.cfg の読み込みを
・ ドキュメントから uplpatch.ltx	uplcore.ltx から uplatex.ltx
を除外 (based on platex.dtx	へ移動 (based on platex.dtx
2016/05/08 v1.0h) 9	2016/08/26 v1.0m) 3
2016/06/06 v1.0k-u01	2017/11/29 v1.0q-u01
・ up \LaTeX 用にドキュメントを全体	・ 英語版ドキュメントを追加 (based
的に改訂 1	on platex.dtx 2017/11/29
2016/06/19 v1.0l-u01	v1.0q) 1
・ パッチレベルを uplvers.dtx から	